

昭和12年7月1日（木）

九時出発。天気曇り、時々雨。十時二分汽車の人となる。

昭和12年7月2日（金）

次第に快晴。一時間待合わせ。二時三十分発、四時三十二分到着。スシ三つ駅にて求む。当新町にてバスに乗るべく待合わせしに、澄、久、其のバスに乗り居れり。帰りて水浴。

昭和12年7月3日（土）

山崎氏留守中來られ、此日四時、井上夫人の葬儀に付き、自分の家に立寄ることを通告して昨日歸れりと聞き、三時山崎氏を訪ひ一緒にお寺に行く。山崎氏は光教会を代表して弔辞を朗読さる。一燈園、田北耕也氏は野間の人。九大法文科を終え一燈園内のインテリとして調法がらる。八日に再び來たり、光友の為に話しをして貰ふこととしたる由に付き、廻状の作成を頼まる。私製葉書25を求む。名刺50錢で注文す。

昭和12年7月4日（日）

道子にも手伝って貰ひ四十七枚書く。駅前山崎氏を訪ふも不在。五時帰宅。卵四錢にて三ヶ求む、騰貴せし由。昨の快晴に反し、曇り多少雨。蒸暑し。ラジオ不具合に付き、放送局、的野君に依頼し技師の派遣を求む。夜蚊帳を吊り戸を開放したるに、北風強く巻き上げて蚊を帳中に入れ、大分刺さる。十時頃寢床。澄子工合悪きものの如く食を節す。

昭和12年7月5日（月）

十時山崎氏を訪ふて私製葉書を提出す。其の足にて松屋に行く。道子久子に偶然逢ふ。鰯の缶詰十三銭にて求めたるを、更に一缶追加せしむ。万年筆5, 00にて求む。名刺四十五銭にて注文す。其の儘販る。久子三時頃、道子其の後、半時間販る。夜は冷うどん。

昭和12年7月6日（火）

曇天なるも蒸暑し。昨夜寝て居る間も熱し。敷布を濡らし氣持悪し。莫産に換えんことを欲し、午後新柳町に至り三十三銭にて三枚求め来る。久子雑巾にて払拭し呉る。此の夜より之を敷く。澄子久子皆、之を使用す。此の夜秀夫来たり。歯ブラシ27、ライオン端磨き8、求め来たり呉る。十時近く販る。道子等風呂に行く。余水浴して寝る。時に十時を過ぐ。

昭和12年7月7日（水）

晴れ、驟雨の地方もありたるらし。敷布団乾かして貰ふ。十一時放送局相談所より態々（わざわざ）来たり、試験し呉る。氷水馳走す。コンデンサーに故障ありと云ふ。午後三時、余セットを持参し放送局に至る。先刻来宅の技手君居る。的野君に逢ふて礼を述べて販り、新市場にて、トマト12銭にて三四箇を求め、販宅。釜中にある感あり。木下君より返事来る。

昭和12年7月8日（木）

午前中曇り、驟雨の模様。多少の雨、午後より次第に快晴。昨澄子久子玉屋行、反物求め来る。余の名刺も持来る。大博劇場にて藤原義江音楽会丸札、景品として玉

屋より貰ひ来たり。道子一時より行く。入道雲見ゆ。盛夏らし。暑気酷、九十度を上下すと謂わる。午後七時出掛く。号外に曰く、日支両軍廬溝橋附近にて、支那軍の不法射撃に端を発し交戦中とあり。夕刊を見て二十五分出発、着時間八時前十分。松尾森両氏あり、山崎氏福永氏来る。重松ヨネ、田中一枝両女史も見ゆ。何日も来る松居氏遂に見えず。八時半より行事、次いで田北氏より御話を承る。大阪高工卒業の後輩より手紙を貰ひしこと、そこに今回行きたること、講演を頼まれ一時間話せしこと、終了後誰も席を去らざりしこと、精工舎時計は渡部時計主の司宰する処、其の令嬢が入園せしこと、及び次第に同人と同様な服装と行動とに変わりたること。基督は、金持ちの救いは駱駝が針の穴を通るよりも困難なりと太息されしが、天香様は此の困難を切り開きて、富豪が救われる事実は何を意味するか、最後に卓子上に踊って居る者を下に置く為には、梯子を用意せねばならぬ、其の梯子の役目が一燈園生活なりと。一時間に渉り講演あり。多大の感銘を与え、更に一燈園生活に入りし動機を二十分間。十時半退散。余に会計を命ぜらる。家に帰りしは十一時、皆寢床。余水浴の上、蚊帳を吊り寢床。

昭和12年7月9日（金）

放送局早田泉治氏より葉書。電解コンデンサー3, 00、280日真空管1, 80、計4、80円を要せりと。一万ボルト抵抗も不良とあり。此日朝五時半、黒門寺に行く。誰も居らず単独掃除す。松尾さん宅より若者来たり。次いで田北、山崎両氏、福永、森両氏、計六名。七時二十分終了。心経を念誦して茶菓の餐を受け退散。田北氏野間行。余十時再び山崎氏を訪ふ、恰度田北氏あり。山崎

氏と一緒に家を出る。森氏来らる、三人して送る。十時四十三分発車。福永氏遅れて来らる。同氏に一区分托鉢に預かる。南新町下車。十一時に十分前、恰度久子バスにて来る。一緒に電車に乗り福日前下車、相談所に至る。早田氏不在。他の係員に、4, 80円を提出してラジオを受取り、新柳町市場より鮮魚10銭求め帰る。此日朝来驟雨の模様あり。パイロット万年筆二本、並木製作所に小包にて発送、ペン先交換を依頼す。ラジオ据付く。完全に聞こゆ。夜九時半寢床。

昭和12年7月10日（土）

昨夜来、雷鳴低きながらも時々聞こゆ。今朝稍（やや）高し。朝来降雨。午前中幾分立直る気配ありしも、午後には完全に積雲重畳、今にも降りそうにて経過す。澄子腸胃（ちょうい）病、未だ治療するに至らず。相談所に連れ行かんとするも承知せず。二階北風強く吹き、冷氣暑熱を払ふ。榎氏より支那菓子を頂く。家主氏来、水質を吟味す。近来余程飲み良くなる。久子に名刺を印刷屋より持来たらしむ。バス切符呉れと云ふ。今日でなくもがな、序でに寄ればよしとて与ひざりし。然るに秀夫に雑誌を借りる為、行く用を控えて居り、勝手に行きたるが、後刻販りて名刺頼まれし覚えなしとあり。此の事と前後して、静江氏より電報にて「オマチモウス」と来る。何の為に余の来秋を求めるのか、女中の問題が再び突発し、余の解決を俟つ意味か、それとも遊びに来いの意味か分からず。仍（よ）って「二ロウ セウチカ クワシク テガミ」と電報す。参拾円電為替にて送り越す。午後七時過ぎ、二郎より「ココロヨリ オコシヲマツ云々」電報あり。是れにて女中問題で、静江氏より余に救援を求む

る目的であらざるを知り安神せり。例の印刷屋に寄りたるに、職人は誰も居らず若者が一人居り、事情を告げたるに再び原稿を要求す。少時して此家の妻女来たり。原稿を持来たり、確かに代金も頂き居るに失念し居れりと弁解謝罪す。

昭和12年7月11日（日）

雨模様、何れにも出かけず。臨時ニュースを聞き、日支事変風雲急を想ひ、二郎へ返事出す。富士登山序でに行けと道子謂ふ。其の富士登山さえも、事変の進展模様に就いては、福日にて中止の挙に出づるやも知れぬと思料する旨、記載せり。随って出発期日未定。

昭和12年7月12日（月）

夜半より降雨、可なり烈し。黎明と共に歇む。天気次第に晴れる。澄子病氣猶平癒せず。道子漸く悪き傾向あり。午後三時簗島局に至り、年金及び二郎送金三拾円貯金す。後藤静香氏、人間道中到着。北風涼し、裸体では聊（いささ）か冷ゆ。順調と云ふべからず。北支事変ニュースを聞くべく、夜は九時半後の分までスイッチを入れ、十時過ぎ寢床することとなせり。低温水浴を欠く。

昭和12年7月13日（火）

午前中快晴、午後は曇り。四時過ぎより再び晴れかけたり、割合に風低温。久子に掛時計を油差しにやる。60銭と云ふ。巖より盂蘭盆に郷里に展墓するなら、旅費60円を準備し置けりと葉書、道子宛来る。福日富士登山決定の新聞を見る。二十九日出発とあり。

昭和12年7月14日（水）

朝五時頃より降雨、時々歇むも終日降り続く。朝新聞を郵便受箱より取出せしに、昨二号便配達の静江氏よりの手紙あり。余と道子と連名故、之を見る。二郎は夏物何も持たず、聞けばそちらに置いてあると。父上が来らるる際、持参願ふ、小包でもよしとあり。二郎が残せし着物は、白飛白（かすり）及びツボン各一枚なりと云ふ。それを送らせることにせり。道子は序でに菓子でも入れてやりたいと、殊勝な心懸けと云ふべし。澄子漸く快方に向かう。三時半頃雨は本降りとなる。併し少時して歇み、夜に至り相当猛烈に降りしきる。昨は冷氣、水浴し要せざりしも、此夜は水浴して十時寢床。

昭和12年7月15日（木）

曇り、驟雨模様。八時頃まで多少降り、後歇み午後二時頃より降り出す。道子久子外出。福日富士登山申込受付十六日なるも、此日申込と同時に会費27,50円支払う。久子と共に55円。十時頃出掛けたり。東京貢氏より書面、母姉十二日大阪に販ると。道子等三時過ぎ販る。二時頃より降り出すと見し雨も遂に降らず。山陽沿線及び熱海附近、可なり猛雨を降らせる如し。余の名刺受取り来る。紙質は松尾の方よし。鯛缶詰二つ松屋より特価にて求め来る。福日登山、団体の会費納入者多数ありたる由。四時半夕食。夜秀夫来る。動員電報あるやに付き、局員、頗る緊張し居れる由。九時半過ぎ販る。道子風呂に行く。

昭和12年7月16日（金）

曇り、処によりて驟雨あるよう見らる。澄子猶臥床、起上がり得ず。道子、稍弱る。今日は温度多少上昇。夕飯

粥食流汗して食す。多少降雨ありしも暫時にて歇む。時計出来上がり、一昨日より下座敷の上框（かまち）の柱に掛く。涼しく音して時を報ず。並木パイロット製作所より受付票発送越せり。夕飯後裸体となる。四五日以来初めてなり。十時寢床。

昭和12年7月17日（土）

朝小雨、黎明と共に歇む。曇り時々陽が射す。南の風、入道雲あり。昨夜は雷雨、朝に及べるもの。午後久子、福日社に会員証を貰ひに行く。前日申込みたるに不拘、既に余の分111号となり居り。四時過ぎ雷鳴、驟雨来る。五時頃より漸次恢復。午後十時寢床。水浴。風涼しかりしも、汗多かりき。

昭和12年7月18日（日）

大体に於いて霽れ、薄雲漲り風多し。温度は相当高かりし。並木パイロット製作所より、這般のペン送り起こす。書留料先方持ちとて気の毒の感あり。大分完全になりし観あり。大気は完全に恢復せりと思ひしに、遠くに雷鳴を聞き、夕方東南方一角黒雲に閉ざさる。而も雨降らず。早く寝む。道子澄子を明日相談所に連行を求む。曩（さき）に診療所に行くと謂ふ。秀夫に相談せよと云ふ。明日相談するも診察は明後日となる、其の為相談所にても可なりと申出づ。余快諾す。十時寢床。

昭和12年7月19日（月）

暑熱強し、十時出発。此の間余の髯剃る。澄子久子仕度す。バスにて西中洲に、電車にて西町の手前に下車。多数待合い患者あり。逸早く診て貰ふ、別に余病なし。

薬を貰ふて販る。先生毎月定期に日田に出張する由にて、局長より淡窓日記を得、之に依り趣味講座を賑わし居る。松屋岩田屋を素見、午後0時15分販宅。久子松屋に洋傘を忘れたる由にて、序でに立寄り調べて貰ふ。発見、之を貰受け余より先に販るも、市場にて鮮魚を買い求め、余と再び南新町にて一緒になる。バスにて販宅。澄子病氣は胃腸カタル、薬を頂きて戻る。井尻碌氏より手紙来る。五十日振りにて去る八日、長崎、雲仙、阿蘇、別府、耶馬溪を経、戸畑の親戚を訪ね、再び二日市、福岡を見て、夜に至り販戸せる由。水浴。九時過ぎ、道子久子風呂行。

昭和12年7月20日（火）

曇り。後雷雲表れ、雷鳴遠く聞こゆ。朝巖より書面、60円送付越せり。二時過ぎより降雨。雷雨らし、余り土砂降りせず。四時過ぎ歇み、六時頃快晴に向かう。巖より送金、十六日豊後町に取組み十九日八屋より送付越す。手紙書きに数日要せしものと見ゆ。愛子より三枚に涉り、巖は数行に過ぎず。二号配達便にて市役所より、土地賃貸調査員選挙、投票所入場券（358番）送付越せり。来る二十六日、午前八時より四時まで、市記念館に出頭の指令なり。本日土用入り。午後十時寢床。

昭和12年7月21日（水）

朝五時、大刀洗飛行機編隊、九機を一団として拾数回に百余機、東に向いて影を没す。午前中快晴、気爽やかに風涼し。後多少曇り。誰も何処へも行かず。海水浴に就いて橋本昇君に、道子より適當の間貸しを捜査依託す。東京井尻碌氏より、同氏妻女の妹、央子詩集送付あり。

肺を病み三十三歳にして逝去、才子多病を地に行きしものか。巖に手紙発送す。余毎日、観音経を誦す。ラジオ朝の修養にて、清水谷恭順氏の講話に刺戟せられたるに依る。

昭和12年7月22日（木）

晴天、終日雷鳴を聞かず。多少曇りしことあるも大体に晴れ。南新町??九州総本店の小僧が御用聞きに至る。久子其の小僧が、唐津の官舎に御用聞きに来たものだと懐かしむ。これは二三日前のことだ、爾来毎日来るようになった。富士登山も近付き、一面逡信局より何等の通報なし。聊か焦躁の憾みあり。

昭和12年7月23日（金）

晴れ、暑気猛し。本月に入りて最高記録なるやなり。中尾氏より午後の便、日誌様の記事到着。大内田氏を訪ふ積もりなりしが、暑さに辟易中止。逡信局にも竹内先生にも夫々（それぞれ）書面発送。竹内先生は病氣見舞状なり。澄子次第に恢復に向かう如し。数回沐浴。九時半就床。

昭和12年7月24日（土）

台風近まり、嫌悪の天候となる。午後一層甚だし。久子、ゴロゴロし始む。例の胃腸病になる前兆とも思わる。道子寝冷え風邪の気味ありとて、昨日来、久子同様の態度なり。それでも市場に買物に行きたり。余三時、大内田君を訪ね、バス三区春吉一丁目にて下車。生憎氏不在、名刺を差措き松屋に行き、道子より頼まれた菓子特価もの、ビスケ百匁18銭を二百匁求め、鰯缶二つ26を求め

新柳町下車。市場を覗くに、トマト三百匁10銭買わずに
飯宅。四時半夕飯、五時半水浴。此日午後二時、澄子
に理髪し貰ふ。曇天の儘、遂に降雨を見ず、夜に至る。
風涼し、連日の暑熱を払ふ。

昭和12年7月25日（日）

嶮悪の空模様。午前中は其の儘維持し、午後より降雨、
次第に風力強烈を加ふ。向い側の家より午前中、赤子の
泣声す。久子二階に上がり来たり、覗き見て指示す。産
婆沐浴を望見す。妻君腹大きかりしを知らざりし。三時
少し前秀夫来る。次第に募る風雨に飯るにも飯られず。
四時に十五分程前、少しく小降りに立去る。夜に至りて、
一層強しとの予報あり。広美へ帰郷を通告し、上原へ暑
中見舞いの返事に、此の事を通知す。ラジオ講演講座集
を購入すべく、三円三十銭一カ年分振替にて振出す。

昭和12年7月26日（月）

午前中猶風雨収まらず、午後より次第に歇む。村上係長
より返事あり。静養は引継ぎ後にせられたし、一両日本
省決裁の筈、其の際は直に電報すべしとあり。午後三時、
土地賃貸価格調査委員の投票に記念館に行く。木村賢三
の名が某局員に似通ふを以て、看板によりて投票す。帰
りに雨に逢ふて、少時箕島市場に立往生す。大分泥土を
はね上げたり。帰れば逓信局より電報あり。至急官報70
字の長文なり。「貴下は中津駅前局長を命ぜらるる見込
み、本日末事務引継ぎ差支えなきや、熊本逓信」右によ
り明朝中津に行くこととしたり。

昭和12年7月27日（火）

曇り。朝五時十五分出発、四十五分頃発車。九時中津着、巖在宅。恰度木下君より小使いが手紙を持参し居る、余受取る。乃ち直に出局ありたしとあり。水浴の後、羽織袴にて出局。中村氏に面会、電話にて五日に延期を懇願したり。各室を巡りて帰る。夜四時鰻飯の馳走あり。四時の列車にて帰宅せんとしたるも、頻りに留めるので泊まることにせり。尤も間も合わず。六時の分なれば十時を過ぎて到着し、皆に気の毒とも思ひしによる。十時寢床、蒸し暑し。雷鳴、夜降雨。

昭和12年7月28日（水）

夜半より降雨、朝に至り歇まず。九時頃巖外出、余十時四十三分の列車を指定す。巖タクシーを傭う、時刻移るも来たらず。十一時四十六分に延期し、足駄及び和傘を借りて土産にトマトを貰ひ出発。召集兵士各駅共頗る多し。予後備特科隊員多し。四時帰着。五六通の暑中見舞状到着。中尾氏よりの部厚きものあり、取戻しのを再び送付越せるなり。苦心して書いたもの故、送付越せるものと認む。夕食に鰯缶詰を開く。

昭和12年7月29日（木）

朝来模様悪く、遂に降雨。余十時半仕度し、道子にネクタイ止め及び中尾氏へ土産物カステーラを、岩田屋に求めしむ。尤も、晴雨洋傘を買ひに行くと称し居りしを以てなり。十時半出発。久子をして拾五円、簗島局より貯金払戻さしむ。此間バス終点、否始点にて待つ。十一時五十分駅着。此日応召軍人の見送りに対し、受付を設置、福日のマーク入り社旗及び腕章の社員が、受付に数名

あり。富士登山団体の受付のみは開始されず、不思議に思ひ、余自身訊ぬ。果然富士登山は時局の為、車両の都合付かず中止せりとあり。新聞を見て居らぬ悲しさ、此の失敗を招けるなり。此日保険局出張員の見送りとかにて、保険部、江頭君等旧知の人々見ゆ。中尾氏に電報して販る。道子久子、岩田屋に再び行く。雨降らず。カステラ代1、75、ネクタイ止め30、計2、05渡す。日支事変拡大の兆しあり。動員相垂（つ）ぐ。石橋君、野戦郵便吏として従軍の命来たと。今日秀夫送別会は、蓋し同君を送るものか。カステラは小包として送付のこととせり。

昭和12年7月30日（金）

夜中降雨せし如し。朝より曇り。猫仔を生む。三匹の内皆生を得て産まれたるものなし。久子投棄し来る。生まれ出でし場合の措置に関し、種々悩みの本なりしが、死仔を生みて安堵せり。十一時半、皆市内に出掛く。中尾氏への小荷物は、駅に久子をして出さしめ25銭取らる。逓信局監督課長より八月五日事務引継ぎの旨、念を押し来る。立会に逓信局より臨局の筈。挨拶状調製の為、木下君を煩わすべく手紙原稿を発送す。

昭和12年7月31日（土）

連日の鬱陶敷天候は解消したらし。今日は晴空を見る。蒲団を乾かして貰ふ。午後三時過ぎより雷鳴、夕立あり。間もなく霽れる。久子澄子さんと海水浴に行くべく、秀夫宅に至る。驟雨の為如何にせしや、久子夕方販る。夕立経過後、百道に行き水浴せし由。秀夫も一緒なりし由。上野村鋤木田、永末琢美氏来。住吉に謄写版刷り見習に

十日間程来て居ると。二三日前にも一度訪ねたるも、遂に不明の儘、眠れる旨咄さる。此の夜泊めてやる。近くに居るなら遠慮するかと思ひの外、二つ返事で承諾す。夕食も済まし風呂にも入りて来たれる由。色々其の後の境遇を聞く。目下市場小学校にて代用教員を務め、四十円を得居ると云ふ。郵便局よりは収入多きを喜びやる。心配が多しと云ふ。新しき蚊帳を吊りて、余も同じ部屋に寝る。代用教員を何時までやる積もりかを質す、不明と答ふ。十時寝床。